

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 7 日現在

機関番号：34415

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530662

研究課題名(和文) 観光と社会関係資本に関する地域社会学的研究

研究課題名(英文) A Regional Sociological Study of Tourism and Social Capital

研究代表者

足立 重和 (ADACHI, Shigekazu)

追手門学院大学・社会学部・教授

研究者番号：80293736

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円、(間接経費) 720,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、岐阜県郡上市八幡町の「郡上おどり」を事例にしながら、伝統文化を活用した観光現象と地元の社会関係資本(ソーシャル・キャピタル)がどのような関係にあるのか、を明らかにすることにある。この点を明らかにすることを通じて、学術的には構築主義的な観光文化論を乗り越えるとともに、実践的にはマス・ツーリズムとは異なる、地域社会独自の観光戦略のあり方や方向性を指し示す。

研究成果の概要(英文)：The present study aims to clarify the nature of the relationship between local social capital and the tourism phenomenon of utilizing traditional culture, considering the Gujo Odori in Gujo-Hachiman city, Gifu prefecture as a case study. Through an examination of this aspect, the objective is to go beyond the academic constructivist theory of tourism culture and focus on the independent tourism strategy and approach of local communities which, in practice, differs from mass tourism.

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：地域社会・村落・都市

キーワード：観光 社会関係資本 郡上八幡 郡上おどり 頼母子講 セリの遊び 地元住民の楽しみ

1. 研究開始当初の背景

2000年代に入り、わが国では、観光が国づくりの重要な産業として位置づけられるようになってきた。現在、官民あげて「観光立国」が目指され、「ビジット・ジャパン」といったキャンペーンや観光ビザ緩和などの政策がとられている。これらの一連の動きでは、もはやこれまでの基幹産業での成長が見込めなくなった現代日本社会の構造転換を背景に、地域活性化、雇用機会の創出、国際理解の推進などが謳われている。とくに日本の場合、テーマパークやサブカルチャーといった現代文化もさることながら、民俗芸能、景観、風土といった伝統文化のほうが圧倒的に観光資源となっている。これら伝統文化による観光は、その土地の身近にあるものを活用するという側面が強い。

このような現状をふまえ、近年の観光社会学・人類学者たちは、観光現象と伝統文化のかかりについて、観光資源となる伝統文化は、地元住民と観光客との相互作用のなかで構築されたものであるという構築主義的な視点から観光戦略に長ける住民の主体性について言及してきた。この構築主義的視点をさらに発展するかたちで、これまでの社会学・人類学・民俗学の垣根をこえた「観光文化論」という領域が誕生し、観光研究はますます多くの人々の関心を集めている。このようなわが国での研究状況は、観光地における「オーセンティシティ」(真正性)の構築を主張する E.M. プルーナーらによる海外の構築主義的研究と軌を一にしている。

以上のような社会動向と学問状況を見据えながら、研究代表者はこれまで岐阜県郡上市八幡町(以下、郡上八幡)の観光資源である「郡上おどり」の調査研究を続けてきたのだが、そこで見出されたのは、観光化とは距離を置きながらも、自分たちの“楽しみ”を追求する地域づくり運動であった。その運動は、地元有志から湧き上がってきた、身近な人間関係を直接活性化しようとする、価値形成的な性格をもっている。この事例研究から言えることは、地元住民の生活が必ずしも生業(ここでは観光業)で占められているのではない、という点である。この点を地域社会全体がしっかりと認識できるかどうかで、マス・ツーリズムに流されない、観光現象と伝統文化の“適度な”関係が保たれると、研究代表者は議論してきた。

ただ既存の観光社会学・人類学的研究からすれば、研究代表者の議論は、一方でグローバル化する資本主義の影響を受けた地域社会の現状を無視しているのではないかという批判に晒されている。観光は経済的に疲弊した地域社会にとって唯一の活路ではないか、と。たしかに、地元住民の生活全体をとらえた地域づくり論は、観光のありようについて積極的に語ってはいない。だがその後、地元にてフィールドワークを進めていくと、観光化とは異なる、価値形成的な地域づくり

を担う有志たちであっても、決して観光化そのものを否定しているのではなく、現状の踊りのうえに住民本位の楽しみが覆いかぶさることによって、地元の楽しみにポイントを置いた観光化を目指していたのだ。これは、圧倒的多数の、一時的な滞在者に振り回されない、自分たちの生活全体を優先させた観光開発だといえよう。はたして、それはいったいどのようなものだろうか。

この問いに応えるうえで重要になってくるのは、そのような運動を生みだす母体となった「社会関係資本」(ソーシャル・キャピタル)への着目である。郡上八幡の場合、それは典型的には「頼母子講」にあたる。現在の頼母子講は生活資金の獲得のためではなく、あくまでも親睦目的で結成されているのだが、ここでなされる日常会話が様々な自発的結社を生み、マス・ツーリズムに流されない観光開発を可能にしていくのである。もちろん、頼母子講だけが唯一の社会関係資本でなく、自治会や顕彰会などの地域的連帯も上述した観光開発に重層的に関わっている。すなわち、地域社会においてしっかりと社会関係資本が重層的に備わっていれば、たんなる「見せ物」に終始しない、地元住民も楽しめる伝統文化を活用した観光開発が可能になるのである。それと同時に、そのような文化形態が、ひるがえって地域社会に備わった重層的な社会関係資本をも活性化していくだろう、と研究代表者は考える。このような伝統文化を活用した観光と社会関係資本の循環は、はたしてどのようにして起こるのだろうか。

2. 研究の目的

そこで、本研究の目的は、郡上八幡の「郡上おどり」を事例にしながら、伝統文化を活用した観光現象と地元の社会関係資本(ソーシャル・キャピタル)がどのような関係になるのか、を明らかにすることにある。この点を明らかにすることを通じて、学術的には構築主義的な観光文化論を乗り越え、とともに、実践的にはマス・ツーリズムとは異なる、地域社会独自の観光戦略のあり方や方向性を指し示す。

3. 研究の方法

(1) 研究代表者がこれまで郡上八幡にて参与観察を続けてきた「郡上おどり」を主な対象にすえて、観光化とは異なる近年の住民組織の動きについて聞き取り調査を実施した。さらに、その集まりに参加しながら、そこでの会合の様子や議論の行方を直接観察した。また、郡上八幡に現存する頼母子講についての聞き取り調査を実施した。さらには、その聞き取りから得られた事例のうち、複数の頼母子講に参加し、そこでの会合の様子や会話状況を直接観察した。

それらと並行して、郡上八幡との比較研究のために、「曳山まつり」のある滋賀県長浜

市と「阿波おどり」のある徳島県徳島市を訪れ、観光資源となった、それぞれの祭りや踊りとその担い手となる組織の現状調査を実施した。

(2)郡上八幡の郷土史に関する文献資料(町史、郷土誌、研究論文、歴史文書など)を収集し、郡上おどりなどの観光資源をめぐる歴史的な展開を明らかにするとともに、聞き取りや参与観察から得られたデータと突き合わせた。

(3)観光社会学、環境社会学、地域社会学、農村社会学をはじめ、それらに関連する文化人類学、民俗学、地理学、歴史学などの諸分野における伝統と観光、社会関係資本に関する先行研究を検討し、本研究に必要な理論的パースペクティブを模索した。

4. 研究成果

上記1~3で述べたように、研究代表者は、郡上八幡の社会関係資本である頼母子講の特質について迫ることとなった。その特質に迫るにあたって注目すべきは、なぜお金の貸し借りと飲み会がセットになっているか、ということだった。頼母子講では毎月講員から集めた「講金」を特定の講員に貸し付けるのだが、それを決める方法として、セリが行われる。その際、講員たちは、他の講員を惑わせて自分に有利なように働きかけるために、嘘か本当かわからない発言を連発する。この酒席の中心に位置する真偽を宙吊りにするセリの「遊び」が、お金の貸し借りをめぐる「助ける-助けられる」という非対称な関係性を覆い隠す。そのことで、郡上八幡の講員たちは、酒の入った遊びを装って、「助ける-助けられる」という関係を悟られないように、「さりげなく」仲間を助けると同時に、仲間から「正々堂々と」助けられている。このような、うすうすは気付いてはいるが、気付かないふりをする態度こそ、助け合いを円滑にし、親睦をより深める社会的な仕掛けであったのだ。

実は、このような仕掛けは、何も個々人の間に限定されるだけでなく、時に町全体を覆うことがある。郡上八幡に「Xクラブ」という頼母子がある。講員9名は皆地元の商店主で、ひとり1万5千円の掛け金をもって、毎月某日に例会を開いている。ひとり分の掛け金のうち、1万円が講金に相当する(合計9万円)。残りのひとり5千円で飲み食いした後、残ったお金(ひとり約2千円、全体で約1万8千円)は、クラブで積み立てられ、毎年地元で催す郡上おどりの日に、自分たちが企画・運営する「水中花火大会」の花火代に充てられる。当日の夜、踊りが始まる前に、町内を流れる川に水中花火が投げ込まれ、水のなかでポワッと閃光を発して炸裂すると、澄んだ水の透明感が際立って見える。約20年にもなるこのイベント目当てのリピータ

ーがいるほど、現在では町内外に知れ渡った“観光資源”にもなっている。

ところが、講員自身は、外部から「町の観光のためにやっているのか？」と尋ねられると、(そういう言い方は)「面白くないな」とその動機を否定する。頼母子結成の目的に「町の発展のため」を掲げ、イベントのために花火師の資格まで取った彼らは、「あくまでも自分たちの楽しみのため」にやっているのだと繰り返す。なかには、自分たちの活動をあえて「自己満足の世界」と表現し、毎月飲んで食べてしゃべっておいたら、いつの間にか花火代ぐらい貯まっていたのだという。だから、行政その他の助成・支援・寄付はいっさい断っているのだ、と。つまりここにも、地元を何とかしたいという彼らの熱い思いは、「自己満足」という言い方で表現される頼母子の「遊び」の一種で偽装されている。このことは、仲間内のごく限られた個々人に適用された頼母子の社会的な仕掛けが、町全体に及んでいると言ってよい。それはまるで、町全体を“頼母子する”かのようなのである。

では、このような個人から町全体に及ぶ、頼母子といった社会関係資本が持つ社会的な仕掛けは、現代においていったいどのような意味をもつのだろうか。それは、現状の地域活性化の方向性を再考し、さらに深めることに尽きる。これまで地域活性化といえば、官民あげて生業的・経済的側面から地域の豊かさが語られるのが主流であった。観光は、その代表例だ。ここには、地元=ホスト/観光客=ゲストになって、ゲストがお金を落としてくれさえすれば、やがてホストが幸せになれるという構図があった。もちろん、そのような活性化の方策もたいへん重要だが、本研究の立場からいえば、そこにはほとんどなく遠回り、間接的な印象を受けてしまう。というのも、頼母子の「遊び」が意味するのは、「地元住民がふだん営んでいる人間関係そのものを直接活性化させようとする」ものだからである。その活性化が目指される関係性には当然、単なる楽しみだけでなく、お互いが助け合わなければならない局面も出てこよう。その際、地域に暮らす人々どうしが、どれだけスムーズに、さりげなく助け合いを常態化できるかがポイントとなる。このときの具体的な仕掛けとして、偽装としての「遊び」がひとつのヒントになって、まずは「地域住民の交流」を基本とした地域活性化を推し進めていくことができないだろうか。そのうえに、その地域なりの観光が乗りかかることはありえないだろうか。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 0件)

〔学会発表〕(計 1件)

足立重和、語りとリアリティ研究の可能性
社会学と民俗学の接点から、現代民俗
学会 2012 年度年次シンポジウム『民俗学
的技法の構築を目指して 方法とし
てのナラティブ』、2012年5月23日、成
城大学。

〔図書〕(計 2件)

足立重和 他、せりか書房、語りが拓く地
平 ライフヒストリーの新展開、2013、
61-77。

足立重和 他、ミネルヴァ書房、現代文化
のフィールドワーク 入門 日常と出会
う、生活を見つめる、2012、1-18、149-171、
174-175。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

足立重和、「ソーシャルキャピタル」の事
例と研究動向(招待講演) 人口減少社会
における持続可能な地域モデルの構築に
関する研究プロジェクト、2013年7月23
日、佛教大学総合研究所。

足立重和、郡上おどりの継承を考える(招
待講演) 名古屋政経社教育研究会、2012
年8月17日、ルブラ王山(愛知県名古屋
市)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

足立 重和 (ADACHI, Shigekazu)
追手門学院大学・社会学部・教授
研究者番号：80293736

(2) 研究分担者

()
研究者番号：

(3) 連携研究者

()
研究者番号：